

奈良伝承

第2回

伝統の技などさまざまな技術を受け継ぐ若き担い手にスポットをあて、その仕事への思いなどを語っていただきます。



父と娘での作業。愛犬のりくちゃんがいいつも2人を見守っている。

奈良は日本の筆の発祥の地です。日本の筆のルーツ「奈良筆」は、約1200年にわたる伝統の技法を今に伝えていきます。

奈良筆 伝統工芸士 田川 知世さん(44歳)

しなやかな指先から
生まれる伝統の技



奈良筆について教えてください。

まず分業ではないことが特徴です。原毛の仕入れから、筆を仕上げるところまで、一人の職人がすべてやります。羊やイタチなど、数種類の獣毛を混ぜ合わせて作ります。細かい作業ですが、使う人にとって使いやすい筆をと、心をこめて作っています。



奈良筆はどやうやって作るのですか？

いくつもの製作工程がありますが、例えば、「形づけ」(写真①)では、平均4〜5種類の毛を、寸法を合わせて

段々に組み合わせしていきます。筆の形や書き味が決まる、微妙な技術が必要な大切な工程です。

「練り混ぜ」(写真②)

は奈良筆の伝統技法です。簡単に言うと、もつれた毛をときほぐして伸ばし、巻いて、形を整えるという作業を繰り返して毛を混ぜていきます。

「さらえ」(写真③)

は、水に濡れている毛先を刃物と指でさぐり、はねる毛を引き出します。

「芯立て」(写真④)

は、ふのりを十分含ませた毛を、穂の太さに分けてコマという筒に通して、太さを決めます。筆は陰干しで自然乾燥させるので、天気次第で仕上げまでの期間が変わります。

小さい頃から家業を継ごうと考えていましたか？

もともと服飾関係の学校に通っていましたが、中退して何をしようかと迷っていると、家が奈良筆の製造元でした。女性の職人はあまりいないし、



① 形づけ



② 練り混ぜ



③ さらえ



④ 芯立て

父に聞いたなら「やる気があればできる」と言われたので、「やってみようか」と軽い気持ちで始めたのがきっかけです。それから28年になります。若い頃は、友達と遊ぶ時間がなくて、よく父とけんかもしました。

これからの目標について教えてください。

「どんな難しい注文でも、できないと言ったら職人は終わりだ」といつも父に言われていますから、どんなことにも対応できる職人になりたいと思っています。

今、小学校の社会科の授業で伝統工芸体験を教えにも行っていますが、子どもたちにも奈良筆作りのおもしろさを伝えていきたいですね。

最後に、お父さんから一言。



田川 欽三さん (雅号 欽三)

娘には、自分の作った筆に何度も注文がくるよう

な、立派な職人になってほしいですね。後継者がいると、世間の目が違うので、娘が家業を継いでくれてよかったです。でも、あと20年したら、奈良筆の作り手はいなくなってしまう。それではいけないと思っています。